

学習と発達のパフォーマンス化 —『パフォーマンス心理学入門』+『みんなの発達!』を素材として—

企画・司会・話題提供：郡司菜津美（国士舘大学）
企画：青山征彦（成城大学）
話題提供：太田礼穂（青山学院大学）
指定討論：渡辺貴裕#（東京学芸大学教職大学院）

企画：岡部大介#（東京都市大学）
話題提供：広瀬拓海（筑波大学）
話題提供：城間祥子（沖縄県立芸術大学）
指定討論：奥村高明#（日本体育大学）

キーワード：パフォーマンス、ホルツマン、発達の最近接領域

企画趣旨

パフォーマンス心理学とは、個体主義と自然科学主義を特徴とする心理学へのラディカルな批判から出発し（茂呂，2019），人間の集合的発達を支えようとする新しい運動である。本企画では，このパフォーマンス心理学の具体について話題提供することで，これまでの学習と発達の捉え方との違いを示し，参加者皆で学習／発達観を発達させたい。

有元(2019)が「パフォーマンスという言葉を用いるということは，アームチェアに座って頭で考えることから心理学という学問を解放したいという意図がある」と述べているように，本企画では，学習と発達について主知的(intellectual)な理解をすることを目指すのではなく，理解のパフォーマンス化(performance turn)を目指してみたい。本企画では関連する2書『パフォーマンス心理学入門』（香川・有元・茂呂編著，2019）および『みんなの発達!』（フレド・ニューマン著，茂呂・郡司・有元・城間訳，2019）から，発達とパフォーマンスに関する4つの話題を提供する。やり方を知らないことに取り組み，発達するためには，発達の場づくりを皆でパフォーマンスする必要があり，それはアカデミアにしても同じことだ。パフォーマンス心理学においては，研究者自身もパフォーマンスの一部（青山，2019）であることが前提とされる。

なお本企画は，SIG DEE（日本認知科学会 教育環境のデザイン分科会）が主催する。

パフォーマンス・ターンをパフォーマンスする

太田礼穂

本発表では，状況論におけるパフォーマンス心理学への転回（パフォーマンス・ターン）について理論的背景と方法論を比較し，発達

的实践としての「パフォーマンス」の可能性を以下の2点から議論する。

まず，パフォーマンス心理学における，パフォーマンスの位置づけとその意味を紹介する。特にこのパフォーマンスが，個人に紐づけられた成果や技術という意味ではなく，たとえば乳幼児が遊びながら今現在の自分ではない自分に「成っていく」ような協働の過程に注目する理論的装置であることを紹介する。これを支えるヴィゴツキーの遊び論や演劇論，ヴィトゲンシュタインの言語ゲームの議論などの参照を通じ，パフォーマンス・ターンの意義を整理する。

次に，状況論との連続性と不連続性について紹介する。状況論（状況的学習論）では，人間の知的営みがいかに状況の中に埋め込まれ，その中に参加する人々がどのような存在になっていくかに注目する（たとえば Lave & Wenger, 1991/1993）。これは人間の知的営みが社会的起源をもつというヴィゴツキーの理論に基づくものであり，人間の思考や学習の成り立ちを過度に内的プロセスから説明しようとする個人主義的アプローチとは異なる学習・発達に関する知見だといえる。パフォーマンス心理学もヴィゴツキーの理論に基づくという意味で，状況論と思想的起源を共有しているが，両者の違いはいったい何だろうか。本発表では「現実」の分析と制約という観点から，パフォーマンス心理学がもたらす「研究」と「実践」の接続の意味を考えていきたい。

学校外における子ども・若者支援のパフォーマンス

広瀬拓海

近年，貧困や格差が，子ども・若者にもたらず問題に関心が集まっている。本シンポジウムで話題提供者が注目するのは，以上のような問題を受けて，身近な子ども・若者のた

めに勉強や食事、居場所を提供する新しい地域コミュニティをつくり出した人々の動きである。パフォーマンスとは、自分とは異なる人物に成ることであるが、それは既存の社会的な制約を超えた新しい活動やコミュニティを創造（ビルド）することと切り離せない。貧困問題という急速に現れて来た社会的な課題に対して、それらを良い方向に導いていくための地域住民のコミュニティビルドは、まさに今生まれつつある新しいパフォーマンスだといえるだろう。本発表では、以上のコミュニティビルド＝パフォーマンスが、実際の社会的な文脈の中でどのように準備されてきたのかを検討していく。特に、このとき交換（柄谷，2001）の観点からそのプロセスを見ていくことで、パフォーマンスが歴史的な交換様式の変化の中で生じた問題への応答としてあらわれてくる可能性について議論する。

教員養成におけるパフォーマンスの実際

郡司菜津美

現在、新たに教員養成に求められていることとして、(1)主体的・対話的で深い学びの場作りができるようになること、(2)チーム学校の一員として仲間と共同することの重要性について理解させること、の2点が挙げられる。筆者は教員養成に携わる一人として、この2点を重視した指導を行ってきた。そのために応用演劇の一つである「インプロ」を用い、学生たちが教師としてのパフォーマンスを学習できるように重点を置いてきた。

ここでいう教師としてのパフォーマンスとは、やり方を知らないことに皆で取り組める場をつくることであり、講義ではこのことを先取りの体験させた。またインプロとは、共同の価値を学習することができる演劇手法であり、集団の中で失敗を失敗にしない安心感のある場を作る体験ができるものである（Lobman & Lundquist, 2007）。講義ではインプロを用いたことで、学生たちはチームの一員として仲間と共同することの重要性に気付いたと考えられた。

ただ、こうした学生たちの姿は何かができるようになったというよりは、パフォーマンスの意味・意義を体験的に知ったという方が妥当であろう。そこから何が起きるのか？授業である以上、ここが最も重要である。

本発表では、筆者が実際に授業で実践しているパフォーマンスの効果について、皆さんと検討してみたい。

みんなの発達のためのパフォーマンス

城間祥子

『みんなの発達！』は、現代の社会や文化の中で感情の痛みをかかえて生きているごく「普通の人びと」の日常に、ソーシャルセラピーの実践的で批判的なメッセージを届けるために書かれた本である。この本には、パフォーマンス心理学の創始者のひとりであるフレド・ニューマンのソーシャルセラピーに参加した「普通の人びと」が数多く登場する。ソーシャルセラピーは、セラピーと称しているものの、従来の心理療法とは異なり、診断とそれにもとづく問題解決を目指さない。コミュニティを創造するプロセスを通して、自らのライフ（生活、人生、生き方）の全体を転換させる実践である。

ソーシャルセラピーグループは、参加者が自らの発達を創造することを支える場である。参加者は場に「ギブ」することで場の発達に貢献する。同時に、場の発達が個々の参加者に発達と成長をもたらす。グループで試みられた新しい生のパフォーマンスは参加者相互の「ギブ」によって完成し、問題がもはや問題として成立しなくなるような発達が生じるのである。

本発表では、ソーシャルセラピーのアプローチを理解する上で重要ないくつかの概念（ゲットとギブ、全体と個別、言葉、エクササイズ等）を共有するとともに、ニューマンの哲学と実践を、私たちの文化や日常を変化させるためにどのように用いていけばいいのかを議論したい。

参考文献

- 「パフォーマンス心理学入門 共生と発達のアート」 香川秀太・有元典文・茂呂雄二 編著 新曜社 2019
- 「みんなの発達！ニューマン博士の成長と発達のガイドブック」 フレド・ニューマン・フィリス・ゴールドバーグ 茂呂雄二・郡司菜津美・城間祥子・有元典文 訳 新曜社 2019